

『秘密曼荼羅十住心論』の研究(3)

— 広・略両論の帰敬序をめぐって —

福 田 亮 成

一

両論共に同趣旨の帰敬序を見ることが出来る。『辯顯密二教論』には、密教を定義して次のように云う。

夫れ佛に三身有り、教は則ち二種なり。應・化の開説を名けて顯教と曰う。言は顯略にして機に逗かなえり。法佛の談話、之を密藏と謂う。

自性・受用の佛は、自受法樂の故に、自眷属と與に、各々三密門を説きたまう。之を密教と謂う。
此の三密門とは、謂う所の如来の内證智の境界なり。

問う、顕密二教、其の別如何ん。答う、他受用・應化身の隨機之説、之を顕と謂い、自受用・法性佛の内證智の境を説きたまうをば是を秘と名づく。

とあるがごとくである。このことから、当然のごとく、法佛の談話・自性・受用佛の三密門・法性佛の内證智の境が密教の教えであって、教主法佛、法身大日如来が帰敬の対象であることは、明瞭である。この帰敬序は、広論では、その冒頭に、略論では、かの有名な大意序の次に異生羴羊心と第九住心までの綱要がのべられ、そして、

爾⁽⁴⁾れば乃ち九種の心葉は、外塵を拂つて迷を遮し、金剛の一宮(密教)は、内庫を排いて宝を授く。樂と不樂と、得と不得と、自心能くなす。哥に非ず、社に非ず。我心自から証あるのみ。

この文中から、「内庫を排つて宝を授く」という密教の積極性を見ることができよう。

以下、両論の帰敬序の検討に入っていくが、そこに述べられている帰敬の対象は、実に『即身成佛義』にのべられている即身成佛偈の前半の即身についてのそれであった。即ち、体大としての六大、相大としての四種曼荼羅、用大としての三密に及ぶ広大にして立体的な世界に対してであった。

まず広論の偈をあげ、次いで略論のそれをあげてみるが、偈文の意味のあるところは同一趣旨であるが、その文の配列に配慮してみた。

広論	略論
歸命したてまつる。婀・尾・羅・羅・响・缺 の最極大秘の法界体と	歸命したてまつる。金剛内外の寿と 離言・ 垢過・等空・因と

婀(a)・尾(vi)・羅(ra)・响(him)・缺(Khan)とは、地・水・火・風・空の五大であり、最極大秘法界体とは、識大であるにちがいない。

略論では、金剛内外の寿と、離言・垢過・等空・因とは、やはり六大を言っているのであるが、離言はva字で水大、垢過はra字で火大、等空はkha字で空大、因はra字で風大となる。そうすると四字四大はよいとして、地大・識大を、「金剛内外の寿」に当てないと六大にはならない。寿とあるから識といえるが、金剛内外とあり、内と寿(識)にするとして、外をば地大としなければならない。

『即身成佛義』には、

謂く六大とは、五大及び識なり。

まずその根拠として『大日経』卷二、具縁真言品第二の、

我、本不生を覚れり、語言の道を出過し、諸過に解脱を得て、因縁を遠離し、空は虚空に等し。

の偈文から、我覚とは識大、本不生 (anupāda) とは地大、語言 (vāda) の嚩 (va) は水大、諸過 (塵垢 (rajas) の囉 (ra) は火大、因縁 (in) (hetu) の訶 (ha) は風大、虚空 (kha) の欠 (kham) は空大となり、この偈文は、 a · vi · ra · hūm · kham · hūm の六大を説くとしてゐる。

六大の根拠として空海は、『金剛頂瑜伽修習毗盧遮那三摩地法』より、もう一つの偈文を取り出してゐる。

諸法は本不生なり 自性は言説を離れたり 清浄にして垢染無し 因業なり虚空に等し。

この偈文は、『大日経』のそれと同じとし、特に諸法の語を我覚と対比し、次のごとくいう。

諸法とは、謂く諸の心法なり。心王心数其の数無量なるが故に、諸と曰う、心と識と名異にして義

通ぜり。

諸法に、『大日経』の我覚をかさねたいのであろう。

この偈文からも六大を見ることは、広論と同じである。『即身成佛義』では、『大日経』巻五、阿闍梨
 眞実智品第十六から、さらに引用を重ねて、より六大説の根拠を補強している。

広論	略論
舸 <small>キヤ</small> ・遮 <small>シヤ</small> ・吒 <small>タ</small> ・多 <small>タ</small> ・波 <small>ハ</small> ・擘 <small>ヤ</small> の慧と 啍 <small>イ</small> ・汗 <small>ウ</small> ・哩 <small>リ</small> ・嚧 <small>ロ</small> ・翳 <small>エイ</small> の等持と	作 <small>サ</small> ・遷 <small>テン</small> ・慢 <small>マン</small> ・如 <small>ニヨ</small> ・眞 <small>シン</small> ・乗 <small>ジャウ</small> との寂 <small>ジャク</small>

舸 (ka)・遮 (ca)・吒 (ca)・多 (ta)・波 (pa)・擘 (ya) とは、悉曇文字の牙声・齒声・舌声・喉声・唇声の各最初の音と、遍口声の最初の音をあげたものである。略論のそれは、同じことを音ではなく、義をあげている、作とは作業 (karyā) の作。遷とは変遷 (vyūti) の遷。慢とは慢 (māna) の慢。如とは如如 (tathata) の如。真とは第一義諦 (paramārtha) の真 (第一義諦)。乗とは乘 (yana) の乗のことである。広論には、さらに、啍イ・汗ウ・哩リ・嚧ロ・翳エイがつづいている。これは、悉曇十六の母音の中から五字を取り出したもので、啍イ・汗ウ・哩リ・嚧ロ・翳エイは、等持、即ち定のこと、女声である。前の句は、慧とあり子音であって男声をいうのである。これらは、相大の法曼荼羅を表わしている。

広論	略論
制体・幢・光・水生・貝と 五鈷・刀・蓮・ 軍持等と	制体・簾・光・蓮・貝との仁と

制体は五輪塔で胎藏中台の大日如来、幢（略論では、旗）は宝幢如来、光は開敷華王如来、水生（略論では、蓮）は阿弥陀如来、貝は天鼓雷音如来の各々の三昧耶形である。略論に述べられる五鈷は普賢菩薩、刀は文殊菩薩、蓮は観音菩薩、軍持（瓶）は弥勒菩薩の三昧耶形であり、相大である。

広論	略論
日・旗・華・観・天鼓の渤と 薩・宝・法・ 業・内外の供と	日・幢・華・眼・鼓との勃駄 <small>ホダ</small> と 金・宝・法・ 業・歌・舞との人と

日は大日如来、旗（幢）は宝幢如来、華は開敷華王如来、観（眼）は観自在菩薩、鼓は天鼓雷音菩薩の五仏、相大としての大曼荼羅であり、広・略論共通している。

次に広論の薩・宝・法・業(10)とは、金剛界曼荼羅上の四仏の四親近の菩薩であり、薩。王・愛・嬉、宝。光・幢・笑、法。利・因・語、業。護・牙・拳の十六大菩薩の最初の各一つをあげたものである。略論のそれは、金剛界曼荼羅上の中央大日如来の四方に展開する四波羅蜜菩薩の金剛波羅蜜菩薩・宝波羅蜜

菩薩・法波羅蜜菩薩、業波羅蜜菩薩とである。そして、歌・舞との人とは、内の四供養たる嬉菩薩・鬘菩薩・歌菩薩・舞菩薩のことである。

広論

埴・鑄・剋・業及び威儀との

埴・鑄・剋・業と威儀等との

略論

埴は、土を捏して造った仏像。鑄は、金属を鑄て造った仏像。刻は、木を彫刻して造った仏像のこと
で、業と威儀とは、それらの活動のことである。

これらのことは、『即身成佛義』の四種曼荼各不離の説段で明らかになっていることを前提としてい
われることである。

⁽¹⁾若し金剛頂經に依て四種曼荼羅を説かば、一には大曼荼羅。謂く一一の仏菩薩の相好の身なり。

又其の形像を^{さいえ}綵畫するを大曼荼羅と名く、大曼荼羅と名く。又五相を以て本尊の瑜伽を成ずるを、
又大智印と名く。

二には三昧耶曼荼羅というは、即ち所持の標幟、刀劍、輪宝、金剛、蓮華等の類これなり、若し
其の像を^え畫するをもまたこれなり。又二手を以て和合し、金剛縛して成印を發生する、これまた三
昧耶智印と名く。

三に法曼荼羅は、本尊の種子真言なり。若し其の種子の字各の本位に書するこれなり、又法身の三摩地と及び一切契経の文義等をも皆なこれまた法智印と名く。

四に羯磨曼荼羅というは、即ち諸仏菩薩等の種種の威儀事業等なり、若しは鑄、若しは埴等をも亦是れ亦羯磨智と名く。

とある。むろんのこと、この文を根拠として四種曼荼羅の大・三・法・羯を加味したのにちがいない。さらには、すでに『御請来目録』の次の文に、四種曼荼羅についての解釈がある。即ち、

密蔵深玄にして翰墨に載せ難し。更に図画を仮りて悟らざるに開示す。種種の威儀、種種の印契、大悲より出でて一觀に成仏す。経疏に秘略してこれを図像に載せたり。密蔵之要、実にこれに繋れり。伝法受法、此れを弃てて誰ぞ。海会の根源、これにすなわちこれに当れり。

広論

能所無碍の六丈夫 是の如くの自他の四法
身は 法然として輪円せる我が三密なり
天珠のごとく渉入して虚空に遍じ 重重無
碍にして刹塵に過ぎたり

略論

丈夫無礙にして刹塵に過ぎたる

この文章は、「即身成佛偈」の後半にかさなっている。即ち、

重○重○帝○綱○の○ご○と○く○な○る○を○即○身○と○名○く○(無礙諸仏) 法○然○に○薩○般○若○を○具○足○し○て○(法○仏○成○仏) 心○数○心○王○刹
塵○に○過○ぎ○た○り○(無○数) 各○五○智○無○際○智○を○具○し○て○(輪○円) 円○鏡○力○の○故○に○実○覺○智○な○り○(申○す○所○の○こ○の○四○句○は、
成○仏○の○二○字○を○明○す○と)。

『広論』では、能所無碍の六丈夫は、六大体大。是の如くの自他の四法身は、四曼。法然として輪円せる我が三密なりは、三密用大に配当されるであろう。

<p>広論</p> <p>天○珠○の○ご○と○く○涉○入○し○て○虚○空○に○遍○じ</p> <p>碍○に○し○て○刹○塵○に○過○ぎ○た○り○。</p>	<p>即身成仏義</p> <p>重○重○無○</p> <p>重○重○帝○綱○の○ご○と○く○な○る○を○即○身○と○名○く</p> <p>然○に○薩○般○若○と○具○足○し○て</p> <p>心○数○心○王○刹○塵○に○過○ぎ○た○り○。</p>
---	---

とあるごとく同一趣旨をのべたものだ。略論では、「丈夫無礙にして刹塵に過ぎたり」とあるが、「即身成仏偈」の「六○大○無○礙○に○し○て○常○に○瑜○伽○な○り……心○数○心○王○刹○塵○に○過○ぎ○た○り」の最初の句と、最後の句とを

取り上げたものだ。

二

以上、広・略両論の帰敬序の検討から、その帰敬の対象は、まさしく『即身成仏義』の「即身成仏偈」そのものであった。六大体大・四曼相大、そして三密用大が帰敬の行為であろう。私は、六大無礙にして常に瑜伽なりとは、六大は法身大日と私とを共に構成する身・心。即ち五大と識大とが瑜伽、即であることであり。大・三・法・羯の四種曼荼羅は、不離、即ち即である。それは、相としての法身大日と私とが共に不離であることであると。

本来一体である六大と、その展開相である四曼・相大に帰敬するということであろう。用大としての三密加持と、法仏の三密と衆生の三密を同時に、

一一の尊等に刹塵の三密を具して、互相に加入し、彼此摂持せり。……故に三密加持と名く。⁽¹⁴⁾

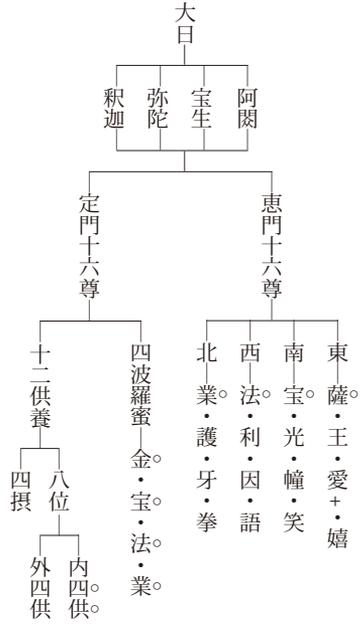
であり、手に印契を結び、口に真言を誦し、心三摩地に住することにより、三密相応し、加持するが故に、早く大悉地を得る、と云っている。

最後に、この帰敬序の内容から金・胎一如(不二)をよみとろうとする考えがあるが、私は金・胎不二でなしに、金・胎合重ということが言えるのではないかと愚考するものである。

以上

註記

- (1) 『定弘大』三・七五。
- (2) 『定弘大』三・七五。この文は『秘密金剛頂経』の説によれば、とする引用文の一部である。この『秘密金剛頂経』とは、後に引用される『略述金剛頂瑜伽分別聖位修証法門序』(『大正』一八・二八七c以下)を略説したものである。ここには、四種法身説の言及がある。
- (3) 『定弘大』三・七六。
- (4) 『定弘大』三・一一五。文中、「樂と不樂と、得と不得と、我心能くなす」とある。これは、広論にある、「若し能く明らか
に密号名字を察し、深く莊嚴秘藏を開けば、則ち地獄・天堂、仏性・闍提、煩惱・菩提、生死・涅槃、辺邪・中正、空有・偏円、
二乗・一乘、皆な是れ自心佛之名字なり。焉れを捨て、焉れを取らん」(『定弘大』二・二)からの翻票であろう。自心佛に
注目している。
- (5) 『定弘大』三・一九。
- (6) 『大正』一八・九b。
- (7) 『大正』一八・三三二a。
- (8) 『定弘大』三・二〇。
- (9) 『大正』一八・三八b。
- (10) 以下は、金剛界三十七尊曼荼羅を图示すれば理解が容易であろう。



(11) 『定弘大』三・二四。

(12) 『定弘大』一・三一。空海は、『御請来目録』において、仏像等として、「右仏菩薩金剛諸天等像並に伝法阿闍梨等影十鋪」とし、
 両界曼荼羅等を初めて日本仏教にもたらしたのである。

(13) 『定弘大』三・二八以下のまとめ。

(14) 『定弘大』三・二五。

〈キワード〉 帰敬・六大・四曼・三密・金胎合重